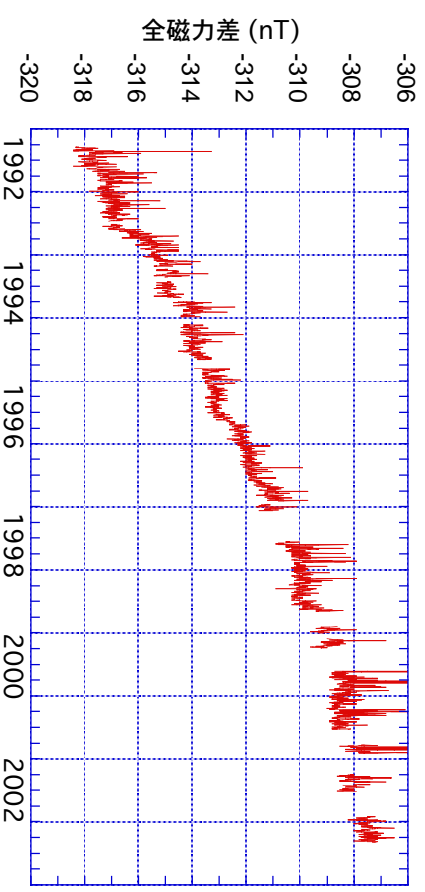
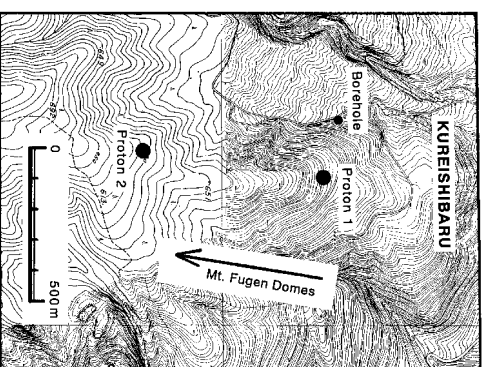
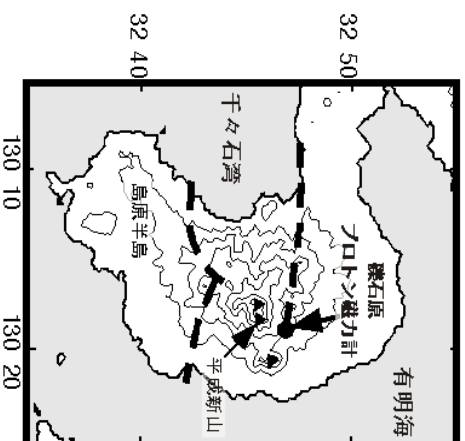


雲仙岳北麓における全磁力変化

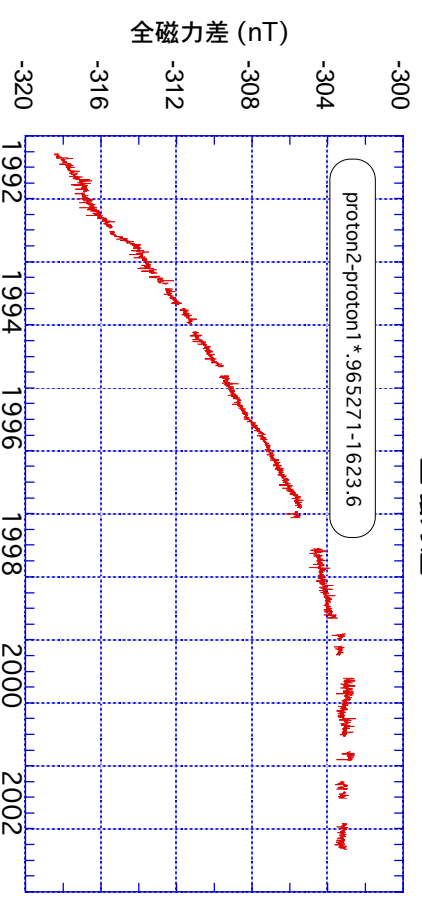
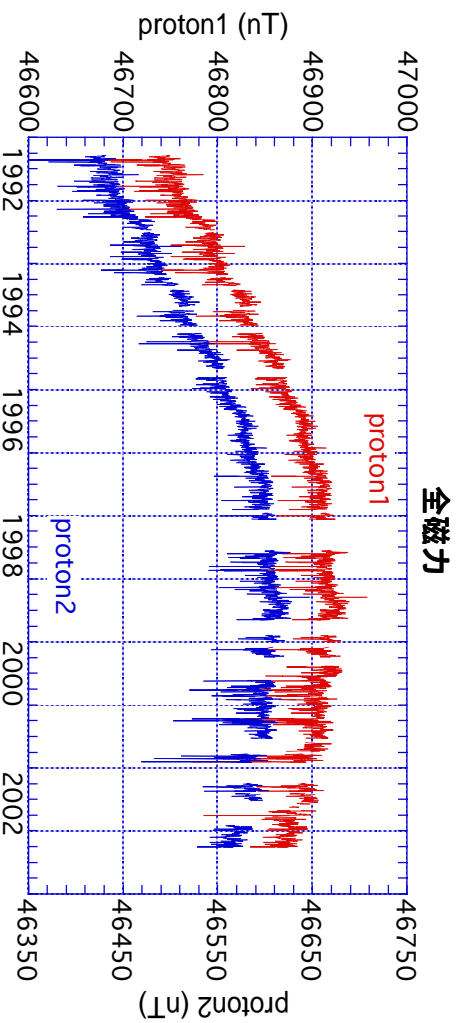
九州大学地震火山観測研究センター

全磁力差 (単純差)



単純差では約1.2nT/yrの増加傾向が見られる。このうち両地点には1度05分の伏角の違いがあり、最近の九州地方の地磁気永年変化(垂直分力+30nT/yr)を考えると、約+0.4nT/yrは永年変化で説明できる。

全磁力差



2地点の全磁力差のばらつきが最小になるように1992年5.6月のデータを使用して係数を決定した。2000年後半より全磁力差が反転し、帯磁傾向となってきた。